

こんにちは。文化財課の児玉です。先週の工藤室長に続き、昨今ニュースを賑わせている「クマ」をテーマに、縄文時代の事例を紹介したいと思います。

縄文時代後期前半には、青森県を中心として、クマなどの四足動物の狩猟場面を描いた「狩猟文土器」と呼ばれる土器が作られます。弓矢とその先に四足動物を表現したもので、青森市内では山^{さんのとうげ}野^{のとうげ}峠^{のとうげ}遺跡から出土した納骨用の大きな壺形土器に同じパターンの狩猟文が繰り返し描かれています。ほかにも、稲^{いなやま}山^の遺跡や新町^{しんまちの}野^の遺跡からも弓矢と四足動物が施された狩猟文土器の破片が見つかっています。

環状列石を主体とする小^{こまきの}牧^の野^の遺跡では、クマと思しき動物を粘土や石で表現した遺物が複数出土しています。一つは、小牧野遺跡PRキャラクター「こまっくー」のモデルになっている土製のクマで、正面から見た顔は三角形を呈しており、丸い耳が特徴的で、かわいい表情をしています。顔から胴体にかけては、この時期に流行した渦巻の文様が施されています。全身をくまなくお見せしたいところですが、残っているのは頭から胴上半のみで、胴下半は欠損しています。儀礼の際に、壊れた、あるいは壊されたのでしょうか。このクマ形土製品は、墓の底面から出土したことから、埋葬された縄文人はクマ猟に関わっていたのかもしれませんが。



クマ形地土製品(小牧野遺跡)



小牧野遺跡PRキャラクターこまっくー

ほかに小牧野遺跡からは、クマとみられる四足動物の土製品を土器内側の底面に貼りつけたものや、石皿の先端にクマの頭や胴体を彫刻したものが出土しています。

このように、クマに関する土製品や石製品の出土から、縄文時代後期前半には、クマ猟が盛んに行なわれていた可能性が高く、また、森の中の最強の動物として畏怖・畏敬の念に基づく祈りや祭りも行われていたと思われます。

今回、紹介した「クマ」に関する遺物は、いずれも『縄文の学び舎・小牧野館』に展示しておりますので、ご覧いただければ幸いです。